日本医史学雑誌　第61巻第3号（2015）　267–271

緒方洪庵が武谷椋亭（祐之）に宛てた書簡（安政4年12月20日）

中山　茂春

医療法人白翠園春日病院／久留米大学医学部非常勤講師（医学史）

緒方洪庵が適塾門下生である福岡藩医武谷椋亭（祐之）に宛てた書簡（安政4年12月20日）

時下寒機凛烈愈御清適奉賀候，御舎弟水山子も御無事御出精御安意被下候

随而草堂長少無戻送光乍憚御安礼被下候寔意外御無音而已無事評次第御仁慈被下候

扨拙誠扶氏遺訓初帙并て薬方編丈ヶ漸ク上木ニ相成候ニ付呈上候笑納被下候

校合も甚不行届其上案文紙不宜甚見苦敷本ト相成申候，御覧之上見附候事も候ハバ御存寄可被下候，別ニ一本篠田氏へ御届被下候御地近況如何過と相聞ヶ義戴奉存候当夏来御政事御改革ニ相成候，此頃当地にても美評有之候，遂ニ御上之御自由ニも相成り候義と奉察候

他日申上候相見不申候

久留米之松下君翼事元芳事当夏秋より帰国いたし居申候同人者急度御役ニ相立候人物ニ御座候何卒洋学辺之事ニ付御用之事も候ハバ同人へ御相談有之而も可宣と奉存候為念可申上置候御出入杯被仰付候ハバ当人別而有難ガリ可申と奉存候尚御序之節御前，御機嫌伺宜ク御取成被仰上可被下奉頼候

万々奉候後臨恐々不備

十二月廿日　緒方洪庵

武谷椋亭様

尚々為道為人千万自重不折と荊妻よりも宜ク申上候様申出候

一メリケン拝謁後申出候ヶ条何角六ヶ敷事之よし下評区々如何相成候事哉と某方ニ恐不申候，何卒諸家御一致之和平ニ相成候様相願候

恐々謹言

武谷椋亭（図3）は九州大学医学部の淵源となった福岡藩医学校「賛生館」の生みの親でもあり，福岡の歴史ならびに九大医の歴史に燦然と輝いている医師です．

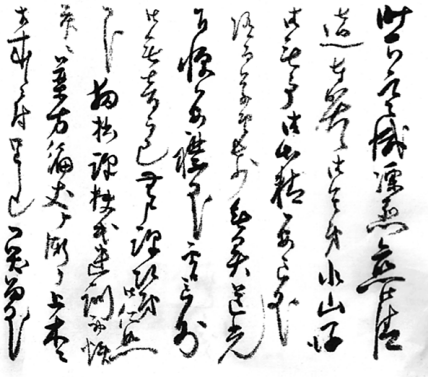

図1　書簡その1

武谷道彦氏（武谷椋亭の直系の玄孫）所有，福岡県立図書館に寄託してあるもの（複写）

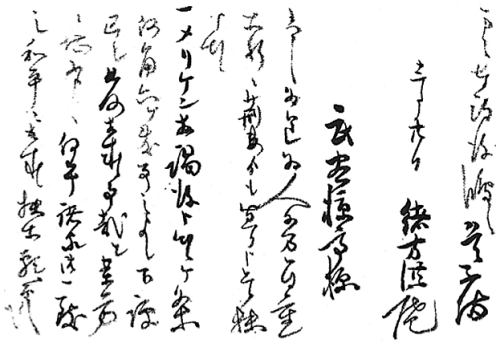

図2　書簡その2

武谷道彦氏（武谷椋亭の直系の玄孫）所有，福岡県立図書館に寄託してあるもの（複写）

図3　武谷椋亭（祐之）
文政3年（1820）～明治27年（1894）
武谷道彦氏（武谷椋亭の直系の玄孫）所有

図4　適塾入門時の直筆の署名（適々斎塾姓名録より）

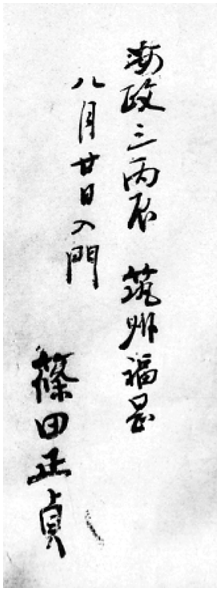

図5　適塾入門時の直筆の署名（適々斎塾姓名録より）

天保14年（1843）に適塾に入門しています（図4）．適塾姓名録の署名637人（2組重複）の中で16人目の入門者であり，早期の門下生の1人です．帰藩後は藩主（黒田長溥）に医学校設立を進言，慶応3年（1867）に設立された福岡藩医学校「賛生館」の初代頭取になっています．

緒方洪庵は，この武谷椋亭宛てに安政4（1857）年から文久2（1862）年までの6年間に23通の書簡を送っています．このうち21通は緒方洪庵と署名，2通は緒方拙斎と署名しています．又文久2年12月25日の書簡は武谷椋亭と篠田正貞（適塾門下生）の2人宛てになっています．

今回紹介の書簡には「扶氏遺訓初帙并て薬方編丈ヶ漸ク上木ニ相成候ニ付呈上候」とあります．扶氏経験遺訓は緒方洪庵がベルリン大学教授・フーフェランドの内科書のオランダ語訳本を，約20年の歳月をかけて訳したもので安政4年（1857）に刊行（全30巻）です．これを洪庵が武谷椋亭に贈っています．書簡には「校合も甚だ不行届，その上案文紙宜しからず，甚だ見苦しき本と相成り申し候，御覧の上見附候事も候ば御存寄可被下候」とあります．又，「別に一本の篠田氏へ御届可被下候，御地近況如何過と相聞き」とあります．扶氏経験遺訓が武谷椋亭の元に書簡と共に2部届き，1部を篠田氏へ届けてくれとありま

す．これは福岡藩医篠田正貞のことですが，適塾には安政3年8月20日に入門しています（図5）．

帰藩後は，篠田正貞は原田水山や塚本道甫らと共に藩の医学校の治療所，いわゆる附属病院の病院取締になっています．

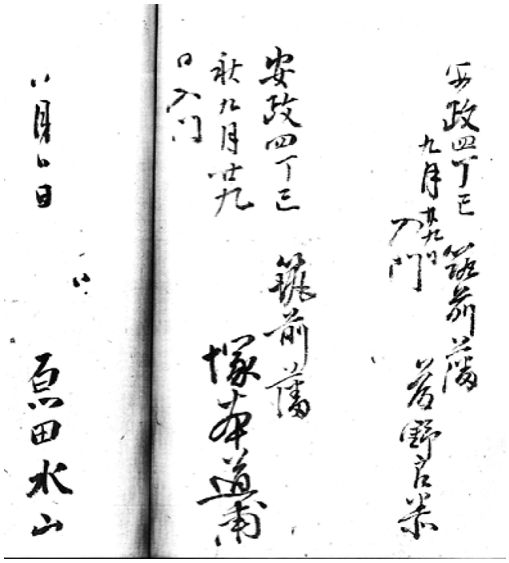

図6　適塾入門時の直筆の署名

原田水山は武谷椋亭の末弟（幼名啓助）原田忍庵の養子となる（適々斎塾姓名録より）

図7　松下元芳（二代）

天保2年（1831）～明治2年（1869）
今津健治神戸大学教授より提供の写真
（筑後久留米藩医松下元芳と同藩医中山元琳が従兄弟に当るので，著者中山茂春に過日贈呈されていた写真）

書簡の中頃には，「御政事御改革に相成候」「当地にても美評有之候」と記されています．これは武谷椋亭が藩主に医学校の設立を進言した後，武谷椋亭の思い通りに医師養成ならびに医療行政の改革がうまくいきつつあるという情報が洪庵にもたらされているのが分かります．

この福岡藩の情報は，安政4年9月29日入門した，藤野良泰，塚本道甫，原田水山の3人によってもたらされたものと考えられます．

この3人は福岡から大阪まで一緒に旅をして，同日に入門しています（図6）．原田水山の事については，この書簡の冒頭，時候の挨拶の次にでてきますが「御舎弟水山子も御無事御出精」とあり，水山は武谷椋亭の末弟で，原田家に養子に行っている人物です．適塾姓名録の署名は原田水山とあります．

書簡の後半は，筑後久留米藩医松下元芳（図7）に関する記述です．松下元芳は福沢諭吉の一代前の適塾の塾頭をしています．福沢諭吉の福翁自伝の中の緒方の塾風の項に，福沢諭吉と松下元芳が大阪の夜店等で一緒に遊ぶエピソードの記述がある位2人は親しかったのですが，その松下元芳について洪庵は次のように記しています．

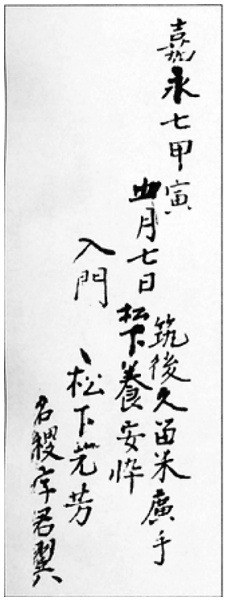

図8　適塾入門時の松下元芳の直筆の署名
（適々斎塾姓名録より）

「久留米の松下君翼事，元芳事当夏秋より帰国いたし居り申し候．同人は急度御役に相立候人物に御座候．何卒洋学の事に付き御用の事も候はば同人に御相談あるも宜しかるべしと存じ奉り候.」

これは，洋学の事について相談したい事があれば，大阪までは遠くて時間がかかるので，急ぐ時は松下元芳に相談しなさいという内容です．

洪庵が松下元芳を自分の代役に出来る程信頼し，高く評価していた事が伺えます．筑後久留米藩史によれば，筑後久留米藩は慶応年間に英語学校創設を決定，松下元芳に英語を学ばせる為に慶應義塾へ遊学させています．福沢諭吉にとって松下は適塾の先輩（塾頭）であり，賓客として待遇し，自ら懇切に教授したとあります（故に，慶應義塾姓名録には名前は無い）又，明治元年の久留米藩の政変により英語学校が立ち消えになった事を知った福沢諭吉は松下元芳に上京を促したが，藩重役の反対で実現されなかったとあります．

追伸（副文）には，荊妻とあります．愚妻という意味ですが，洪庵先生は八重様の事を荊妻と書いておられますが，もちろん八重様は良妻賢母の鑑のような方であります．

メリケンとありまして，某方に恐れず申候とあります．この書簡が書かれたのが，安政4年12月ですが，翌安政5年6月に日米修好通商条約が結ばれております．いわゆる安政の大獄のきっかけとなった条約であります．

某方に恐れず申候の某方とは朝廷，孝明天皇の事と思われます．朝廷は攘夷でありました．

福岡藩主黒田長溥公の側に武谷椋亭がいた如く，孝明天皇陛下のお側に洪庵先生がおられたら良かったかもしれません．

今回紹介した書簡を含め，武谷家に伝わる緒方家関係の書簡は次の通りです．

28. 書簡　緒方洪庵　武谷椋亭宛
　安政4（1857）1月8日
　別啓　正月20日有
29. 書簡　緒方洪庵　武谷椋亭宛
　安政4（1857）12月20日
30. 書簡　緒方洪庵　武谷椋亭宛
　安政5（1858）12月20日
31. 書簡　緒方洪庵　武谷椋亭宛
　安政5（1858）12月24日
32. 書簡　緒方洪庵　武谷椋亭宛
　〔安政5年（1858）～6年（1859）〕6月10日
33. 書簡　緒方洪庵　武谷椋亭宛
　安政6（1859）9月12日
34. 書簡　緒方洪庵　武谷椋亭宛
　〔安政5年（1858）～6年（1859）〕11月8日
35. 書簡　緒方洪庵　武谷椋亭宛
　安政6（1859）12月14日
36. 書簡　緒方洪庵　武谷椋亭宛
　〔安政6年（1859）～万永元年（1860）〕正月21日
37. 書簡　緒方洪庵　武谷椋亭宛
　〔安政6年（1859）～万永元年（1860）〕3月18日
38. 書簡　緒方洪庵　武谷椋亭宛
　万永元年（1860）正月18日
39. 書簡　緒方洪庵　武谷椋亭宛
　万永元年（1860）5月3日
40. 書簡　緒方洪庵　武谷椋亭宛
　万永元年（1860）6月28日
41. 書簡　緒方洪庵　武谷椋亭宛
　文久2年（1862）8月25日
　別紙仰渡書2通添付
42. 書簡　緒方洪庵　武谷椋亭宛
　正月12日
43. 書簡　緒方洪庵　武谷椋亭宛
　如月13日
44. 書簡　緒方洪庵　武谷椋亭宛
　3月18日
45. 書簡　緒方洪庵　武谷椋亭宛
　3月22日
46. 書簡　緒方洪庵　武谷椋亭宛
　8月15日
47. 書簡　緒方洪庵　武谷椋亭宛
　12月24日
48. 書簡　緒方洪庵　武谷椋亭・篠田正貞宛
　12月25日

49. 書簡　緒方郁蔵（研堂）武谷椋亭
〔安政4年（1857)〕4月8日
包紙（緒方洪庵）
50. 書簡　緒方惟準　武谷椋亭宛
8月3日　包紙
51. 書簡　緒方拙斎　武谷椋亭宛
始冬念7日
52. 書簡　緒方拙斎　武谷椋亭宛
〇月28日　包紙

これらの書簡は全て武谷椋亭（祐之）の直系の玄孫に当る武谷道彦氏が所有，福岡県立図書館に寄託してあります．本論文の書簡は所有者の許可を得て，福岡県立図書館にて複写したものです．

最後にあたり，今回の書簡を提供いただいた武谷道彦先生，御指導をいただいた武谷峻一（九州大学名誉教授）様，松下元芳の写真を提供いただいた今津健治（神戸大学教授）様，書簡の解読を御指導いただいた赤司友徳（九州大学医学歴史館）様ならびに宮野弘樹（福岡市博物館）様に深く感謝いたします．